

廣松渉版『ドイツ・イデオロギー』の根本問題¹

平子友長

廣松渉版『ドイツ・イデオロギー』の根本的欠陥は、それが基本的には、アドラツキー版において巻末捕録として収録されていた異文を本文に組み込んで編集したものに過ぎない点にある。従って廣松渉版は、本文および異文の再現においてアドラツキー版と同一の欠陥を共有するものとなっている。廣松渉版が出版される2年前（1972年）に出版された新メガ試行版が『ドイツ・イデオロギー』「第1章フオイエエルバッハ」に関して極めて信頼性の高い編集を行っていたことを考慮すれば、廣松渉版はそれが刊行された時点（1974年）においてすでに学問的価値を喪失していたことが明らかとなる²。

¹ 本稿は、2006年11月24-28日ベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミー主催による「マルクス／エンゲルス編集・独＝日専門家会議」(Deutsch-japanisches Arbeitstreffen zur Marx-Engels-Edition an der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften 24. bis 28. November 2006)の初(24)日に行われたワークショップ1「MEGA第I部門第5巻『ドイツ・イデオロギー』の完成に向けた独日共同研究」(Workshop zur deutsch-japanischen Forschungskooperation bei der Fertigstellung des Bandes I/5 *Deutsche Ideologie*)における訳者自身の報告：Die Grundfehler der Hiromatsu-Edition der *Deutschen Ideologie*の全訳である。訳出に当たって、日本人読者の便宜を図る目的で〔 〕を付して訳者による補足を付け加えた。

² 本節で検討する『ドイツ・イデオロギー』各版のテキストとその表記は以下の通りである。

1. リャザーノフ版：Rjazanov, David Borisovič (Hrsg.), Marx und Engels über Feuerbach (Erster Teil der *Deutschen Ideologie*). In: Rjazanov, D. B. (Hrsg.), *Marx-Engels Archiv. Erster Band*, S. 205-306. Frankfurt am Main 1926.
2. アドラツキー版：Adoratskij, Vladimir Viktorovič (Hrsg.), *Karl Marx/ Friedrich Engels Die Deutsche Ideologie*. In: Adoratskij, V. V. (Hrsg.), *Marx/Engels Gesamtausgabe Erste Abteilung Band V*, Berlin 1932.
3. ヴェルケ版：Karl Marx/ Friedrich Engels, *Die Deutsche Ideologie*. In: *Karl Marx/ Friedrich Engels Werke, Band 3*, Hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag Berlin 1969.
4. 試行版：Karl Marx/ Friedrich Engels, *Die Deutsche Ideologie. Erster Band. Kapitel I. Feuerbach. Gegensatz von materialistischer und idealistischer Anschauung*. In: *Karl Marx/ Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA) Editionsgrundsätze und Probestücke*. Hrsg. von Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der Kommunistischen Partei der Sowjetunion und Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, S.31-119 (Text), S. 399-507 (Apparat), Dietz Verlag Berlin 1972.
5. 廣松渉版：Hiromatsu, Wataru (Hrsg.), *Karl Marx/ Friedrich Engels Die Deutsche Ideologie. 1. Band 1. Abschnitt. Neuveröffentlichung mit text-kritischen Anmerkungen*. Kawadeshobo-Shinsha Verlag Tokio 1974. 廣松渉編訳『新編輯版ドイツ・イデオロギー第

このことを例証するために、『ドイツ・イデオロギー』「第1章フォイエールバッハ」から有名な箇所を二つ取り上げてみたい。一つは、オリジナル草稿の17頁、共産主義社会の基本性格が素描される箇所であり、もう一つはボーゲン {2} の第1頁である。

1. オリジナル草稿17頁における共産主義社会を特徴付ける箇所の成立過程の編集

〔以下に『ドイツ・イデオロギー』各版における本文および異文の再現方法の比較を行う。テキストの再現方法が主題となるため、テキストは基本的にドイツ語原文で掲載する。問題となる箇所は、渋谷正版では以下のようにになっている。〕

「他方、各人が活動の排他的な領域を< [ではなく]、むしろ>⁴⁾ もつのではなく、むしろそれぞれの⁵⁾ 任意の部門で自分を発達させることができる共産主義社会においては、社会⁶⁾ が全般的生産を規制し、そして、まさにそのことによって私は、今日はこれをし、明日はあれをすることができるようになり、狩人、漁師<あるいは>、牧人⁷⁾あるいは批判家⁷⁾ になることなしに⁸⁾、私がまさに好きなように、朝には<靴屋になり>狩りを⁹⁾し、<そして昼 [には]¹⁰⁾ 午後には<庭師になり>釣りを¹¹⁾し、夕方には<俳優になる>牧畜を¹²⁾営み、そして食後には批判を¹³⁾する¹⁴⁾ ということができるようになる。〕(渋谷版 p.64)

本文への注記

「4)「もつ (hat)」の前に、コンマとsondernが抹消されている。この抹消については、いずれの版も報告していない。

5)「それぞれの」は、最初にjedenと書いたが、次に末尾のnの上にmを下記重ねて、こ

1 巻第1篇』河出書房新社 1974

6.渋谷正版：渋谷正編・訳『草稿完全復元版 ドイツ・イデオロギー [序文・第1巻第1章]』新日本出版社 1998

7.年報版：Inge Taubert und Hans Pelger (Bearbeitet von), *Karl Marx, Friedrich Engels Joseph Weydemeyer Die Deutsche Ideologie. Artikel, Druckvorlagen, Entwürfe, Reinschriftenfragmente und Notizen zu I. Feuerbach und II. Sankt Bruno.* Internationale Marx-Engels-Stiftung, *Marx-Engels-Jahrbuch 2003.* Amsterdam 2004.

8.岩波文庫版：マルクス／エンゲルス著『新編輯版ドイツ・イデオロギー』廣松渉編訳、小林昌人補訳、岩波文庫、岩波書店 2002

れをjedemに改めた。そして、このjedemの前にinを書き（inはjedemとその前のsichとの間にむりやりに押し込まれて記されている）、jedemのあとにbeliebigen Zweigeを書いた。修正の結果、in jedem beliebigen Zweige（それぞれの任意の部門で）となった。

- 6) 「社会が (die Gesellschaft)」のあとに、des (またはdas) nurが抹消されている。この抹消については、いずれの版も報告していない。
- 7) 「あるいは批判家 (oder Kritiker)」は、マルクスの筆跡で、「牧人 (Hirt)」のあとに挿入の記号 (+) を付けてその右下に書かれている。
- 8) 「狩人、漁師<あるいは>、牧人あるいは批判家になることなしに (ohne je Jäger Fischer <oder> Hirt oder Kritiker zu werden) は、右欄に書かれている。
- 9) 1 1) 1 2) 「狩りをし (zu jagen)」と「釣りをし (zu fischen)」と「牧畜を営み (Vieh-zucht zu treiben)」は、それぞれ右欄にはみだして書かれたエンゲルスの加筆である。
- 1 0) 「午後には (Nachmittags) の前に、& Mittが抹消されている。Mittは Mittagsの書きかけであろう。
- 1 3) 「そして食後には批判をする (u. nach dem Essen zu kritisieren)」は、右欄にはみだして書かれた「牧畜を営み」のあとに、マルクスの筆跡で挿入線をつけて記されている。
- 1 4) 「狩人、漁師<あるいは>、牧人あるいは批判家になることなしに」からここまでは、草稿ではつぎのようになっている。

(左欄)	(右欄)
Morgens <Schuh->	zu jagen
Macher> <&> <Mitt> Nachmittags	zu fischen
<Gärtner>, Abends <Schauspieler zu>	Vieh-zucht zu treiben u. nach dem Essen zu
<sein>, wie ich gerade Lust habe.	kritisieren , ohne je Jäger Fischer <oder>
	Hirt + zu werden
	oder Kritiker
	」 (渋谷版 p.54-55)

渋谷正版 (1998年) は、編訳者が1995年 (3月~12月) アムステルダム の社会史国際研究所において行った『ドイツ・イデオロギー』オリジナル諸草稿の調査に基づいて編集訳出したものである。その際、リャザーノフ版 (1926年) から新メガ試行版 (1972年) までのすべての既刊諸版をオリジナル諸草稿と比較照合して、前者の後者からの乖離を「注記」において詳説している。渋谷正版は、少なくとも『ドイツ・イデオロギー』「第1章フオイエルバッハ」に関しては、その後刊行された年報版 (2003年) も含め、最もオリジナル草稿に忠実に編集された版である。渋谷正版が、著作権法等の関係で、ドイツ語原文の形で刊行できなかったことが惜まれる。]

A. リャザーノフ版

【本文】

---- während in der kommunistischen Gesellschaft, wo jeder nicht einen ausschließlichen Kreis der

Tätigkeit hat, sondern sich in jedem beliebigen Zweige ausbilden kann, die Gesellschaft die allgemeine Produktion regelt und mir eben dadurch möglich macht, heute dies, morgen jenes zu tun, morgens zu jagen, nachmittags zu fischen, abends <Schauspieler zu sein> Viehzucht zu treiben, auch das Essen zu kritisieren,³ ohne je Jäger, Fischer oder Hirt oder Kritiker⁴ zu werden, wie ich gerade Lust habe.

〔他方、各人が活動の排他的な領域をもつのではなく、むしろそれぞれ任意の部門で自分を発達させることができる共産主義社会においては、社会が全般的生産を規制し、そして、まさにそのことによって私は、今日はこれをし、明日はあれをすることができるようになり、狩人、漁師あるいは牧人あるいは批判家になることなしに、⁴⁾私がまさに好きなように、朝には狩りをし、午後には漁をし、夕方には<俳優になる>牧畜を営み、食事を批判することさえも³⁾できるようになる。〕

【脚注】

3. Die letzten fünf Worte von Marx. 〔「食事を批判することさえも」はマルクスによる〕

4. Die beiden letzten Worte von Marx. 〔「あるいは批判家」はマルクスによる〕

(リャザーノフ版, S.251)

リャザーノフ版は、マルクス、エンゲルスによる改稿過程を本文に組み込んで再現するという表記方法を最初に導入した点で、『ドイツ・イデオロギー』編集史上画期的な意義を持つてはいるが、リャザーノフ版それ自体は、マルクス、エンゲルスによる抹消過程の一部しか再現しておらず、「第1章フォイエルバッハ」のテキストとしては致命的な欠陥を持っていた。リャザーノフ版では、諸草稿の成立過程を正確に再現することは不可能である。このことは、上掲した渋谷正版と比較すれば一目瞭然である。なおリャザーノフ版は、「食後には批判をする nach dem Essen zu kritisieren」と書かれている箇所を「食事を批判することさえも auch das Essen zu kritisieren」と間違って解読している。〕

B. アドラツキー版

【本文】

---- während in der kommunistischen Gesellschaft, wo jeder nicht einen ausschließlichen Kreis der Tätigkeit 35³
hat, sondern sich in jedem beliebigen Zweige ausbilden kann, die
Gesellschaft die allgemeine Produktion regelt und mir eben da-
durch möglich macht, heute dies, morgen jenes zu tun, morgens
zu jagen, nachmittags zu fischen, abends Viehzucht zu treiben, nach 40

³ 右欄外の数字は行数を示す（以下同様）。

dem Essen zu kritisieren, wie ich gerade Lust habe: ohne je Jäger,
Fischer, Hirt oder Kritiker zu werden.

[他方、各人が活動の排他的な領域をもつのではなく、むしろそれぞれ任意の部門で自分を発達させることができる共産主義社会においては、社会が全般的生産を規制し、そして、まさにそのことによって私は、今日はこれをし、明日はあれをすることができるようになり、狩人、漁師、牧人あるいは批判家になることなしに、私がまさに好きなように、朝には狩りをし、午後には漁をし、夕方には牧畜を営み、食後には批判をすることができるようになる。]

(アドラツキー版 S.22)

【異文】

39-40⁴ morgens <Schumacher <und mitt[ags]>, nachmittags Gärtner, abends Schauspieler zu sein, wie ich gerade Lust habe> zu jagen [朝には<靴屋になり<そして昼 [には] >, 午後には庭師になり、夕方には俳優になり、私がまさに好きなように>狩りをし] 40-41 nach dem Essen zu kritisieren [食後には批判をする: マルクスによる挿入] 42 Fischer <oder>, Hirt oder Kritiker [漁師<あるいは>, 牧人あるいは批判家: 「あるいは批判家」はマルクスによる挿入]

(アドラツキー版 S.572)

アドラツキー版の最大の問題点は、「第1章フォイエエルバッハ」の諸草稿の配列順序を恣意的に組み替えて編集したことにある。そのため諸草稿の形成過程に即してマルクス、エンゲルスの思考過程を辿ることは、この面から不可能となった。とはいえ諸草稿の各頁の改稿過程の再現という点に限れば、アドラツキー版は、リャザーノフ版よりもはるかに多くオリジナル草稿における抹消や付加を巻末異文目録に掲載している。この点はアドラツキー版の優れた点であったが、マルクス、エンゲルスの改稿過程を必ずしも正確に再現していないために、その学術的価値は著しく損なわれている。

C. 廣松渉版

【本文】

--- während in der kommunistischen Gesellschaft, wo jeder nicht einen ausschließlichen Kreis der Tätigkeit hat, sondern sich <jeden¹> in jedem beliebigen Zweige ausbilden kann, die Gesellschaft die allgemeine Produktion regelt und mir eben dadurch möglich macht, heute dies, morgen jenes zu tun, morgens <Schumacher <und mitt[ags]>, nachmittags Gärtner, abends Schauspieler zu sein, wie ich gerade Lust habe> zu jagen, nachmittags zu fischen, abends Viehzucht zu treiben **und nach**

⁴ 異文の数字は、本文の該当行数を示す（以下同様）。

dem Essen zu kritisieren, wie ich gerade Lust habe, ohne je Jäger, Fischer <oder>, Hirt oder Kritiker zu werden.

〔「これにひきかえ、共産主義社会では、各人は一つの排他的な活動領域をもたず、<各〔領域〕を>^{N)}任意の各部門で自己形成をとげることができるのだが、共産主義社会においては社会が生産の全般を規制しており、まさしくそのゆえに可能になることなのだが、私は今日はこれを、明日はあれをし、朝は<靴屋<そして昼には>午後には庭師、夕方には俳優になる、〔私の気のおもむくままに〕>狩りをし、午後には漁をし、夕方には家畜を追い、そして食後には批判をする―狩師、漁夫、<あるいは>牧夫あるいは批判家〔という固定的な専門家〕になることなく、私の気のおもむくままにそうすることができるようになるのである。〕（廣松渉版 邦訳テキスト篇 p.34)〕

【脚注】

1. Einschiebung nach dem Proband [試行版による挿入] (ebenda)

(廣松渉版 S.34)

廣松渉版とアドラツキー版を比較すればわかるように、前者は、アドラツキー版において巻末補遺として本文と分離されて収録されている異文を本文に組み込んだものである。廣松渉版の巧妙なところは、脚注に見られるように、随所で試行版に対する言及を挿入することによって、この版が、試行版の成果をも十分に踏まえた版であるという体裁を取っていることである。〔ところが、以下で検討するように、当該箇所におけるアドラツキー版と試行版との相違は、脚注で指摘されている箇所に留まらず、アドラツキー版の誤りを訂正する編集を試行版は行っていた。しかし廣松渉版は、それらの訂正には一顧だにせず、アドラツキー版に執着している。〕

D. 試行版

【本文】

während in der kommunistischen Gesellschaft, wo jeder nicht einen ausschließlichen Kreis der Tätig- keit hat, sondern sich in jedem beliebigen Zweige ausbilden kann, die Gesellschaft die allgemeine Produktion regelt & mir eben	15
dadurch möglich macht, heute dies,	20

morgen jenes zu tun, Morgens zu
 jagen, Nachmittags zu fischen,
 Abends Viehzucht zu treiben u.
 nach dem Essen zu kritisieren, wie 25
 ich gerade Lust habe, ohne je Jäger
 Fischer Hirt oder Kritiker zu werden.

(試行版 左欄 S.58)

[訳文は、アドラツキー版本文の訳文と同一なので省略]

【異文】

58.17-18 l [links] 1 -- jeden beliebigen/
 2 in jedem „ Zweige

58.22-28 l 1 Morgens Schuhmacher & Mitt[ags]/
 „ „ , Nachmittags Gärtner , Abends
 2-3^m “ zu jagen „ zu fischen, „

1 Schauspieler zu sein -----, wie
 2 Viehzucht „ treiben -----, „
 3^m „ „ „ u. nach dem Essen zu kritisieren, „

1 ich gerade Lust habe.-----
 2 „ „ „ „ , ohne je Jäger Fischer oder Hirt -----
 3^m „ „ „ „ „ „ „ „ ----- „ oder

1 -----
 2 ----- zu werden
 3^m Kritiker „ „

(試行版 S.445)

[異文は訳文が煩瑣になるので、省略]

E. 年報版

【本文】

--- während
 in der kommunistischen Gesell-
 schaft, wo jeder nicht einen aus-

が、年報版は、オリジナル諸草稿の改稿過程の再現に関しては、基本的に、試行版に従っている。つまり、アドラツキー版の草稿再現上の誤りの修正は、細かい修正点や脱漏を別とすれば、試行版で基本的に果たされている。

F. テキストの成立過程

オリジナル草稿 17 頁の写真を初めて掲載したのは、渋谷版であった。この写真と上掲の渋谷版の本文訳および注記を参照しつつ、当該テキストの末尾部分の成立過程を時系列的に分解すると、以下のようになる。なお各段階において、削除された部分は角括弧に入れ、付加された部分は太字で表記する。

F-1 【オリジナルによるテキスト成立過程の再現】

1. (エンゲルスによる初稿) Morgens Schuhmacher & Mitt [エンゲルスは「朝には靴屋になり、そして昼」と書きかけて、一旦中断した]
2. (エンゲルスによる即時改稿) Morgens Schuhmacher <& Mitt> **Nachmittags Gärtner, Abends Schauspieler zu sein, wie ich gerade Lust habe.** [エンゲルスは「そして昼」を削除して、「午後には庭師になり、夕方には俳優になることができるようになる、私がまさに好きなように」と書き続けて、一旦文章を完成させた。]
3. (エンゲルスによる改稿) Morgens <Schuhmacher> **zu jagen**, Nachmittags <Gärtner> **zu fischen**, Abends <Schauspieler> **Viehzucht zu <sein> treiben, wie ich gerade Lust habe, ohne je Jäger Fischer oder Hirt zu werden** [エンゲルスは「靴屋になり」を削除して「狩りをし」と書き換え、「庭師になり」を削除して「漁をし」と書き換え、「俳優になり」を削除して「牧畜を営み」と書き換え、さらに「私がまさに好きなように」のあとに「狩人、漁師あるいは牧人になることなしに」を新たに書き加えた]
4. (マルクスによる改稿) Morgens zu jagen, Nachmittags zu fischen, Abends Viehzucht zu treiben **u. nach dem Essen zu kritisieren**, wie ich gerade Lust habe, ohne je Jäger Fischer <oder> Hirt **oder Kritiker zu werden** [マルクスは「牧畜を営み」の後に「そして食後には批判をする」と書き加え、さらに「あるいは牧人」の「あるいは」を削除し、「牧人」の後に「あるいは批判家」を書き加えた]

この作業によって、試行版とそれに倣っている年報版の本文および異文表記は、上記のテキストの成立過程を正しく再現していることが判明した。[新メガが採用している異文表記法は論証的方法 *diskursive Methode* と命名されているが、この方法は東アジアの諸言語に翻訳しにくいという欠点はあるものの、テキストの成立過程を時系列的に再現する上で強みを発揮する。]

F-2 【廣松渉版によるテキスト成立過程の再現】

同様の表記法に従って、廣松渉版におけるテキスト成立過程を再構成すれば以下のようになる。なお廣松渉版がオリジナルと異なる表記をしている部分には下線を付した。

1. (エンゲルスによる初稿) morgens Schumacher und mitt[ags] [エンゲルスは「朝には靴屋になり、そして昼」と書きかけて、一旦中断した。]
2. (エンゲルスによる即時改稿) morgens Schumacher <und mitt[ags]>, nachmittags Gärtner, abends Schauspieler zu sein, wie ich gerade Lust habe [エンゲルスは「そして昼」を削除して、「午後には庭師になり、夕方には俳優になることができるようになる、私がまさに好きなように」と書き続けて、一旦文章を完成させた。]
3. (エンゲルスによる改稿) morgens <Schumacher, nachmittags Gärtner, abends Schauspieler zu sein, wie ich gerade Lust habe> zu jagen, nachmittags zu fischen, abends Viehzucht zu treiben, wie ich gerade Lust habe, ohne je Jäger, Fischer oder, Hirt zu werden. [エンゲルスはまず「靴屋になり、午後には庭師になり、夕方には俳優になることができるようになる、私がまさに好きなように」を削除し、「狩りをし、午後には漁をし、夕方には牧畜を営み、私がまさに好きなように、狩人、漁師、あるいは、牧人になることなしに」を新たに書き加えた。]
4. (マルクスによる改稿) morgens zu jagen, nachmittags zu fischen, abends Viehzucht zu treiben und nach dem Essen zu kritisieren, wie ich gerade Lust habe, ohne je Jäger, Fischer <oder,> Hirt oder Kritiker zu werden. [マルクスは「牧畜を営み」のあとに「そして食後には批判をする」を書き加え、また「あるいは、牧人」の「あるいは、」を削除し、「牧人」のあとに「あるいは批判家」を書き加えた。]

F-3 【廣松渉版のオリジナルからの乖離】

廣松渉版のオリジナルからの乖離は、以下の四点である。

1. 「そして昼」の「そして」は、オリジナルでは&であるが、廣松渉版では und と表記されている。
2. 「朝には」「昼 [には]」「午後には」「夕方には」は、オリジナルでは Morgens, Mitt, Nachmittags, Abends と大文字で書き始められているが、廣松渉版では morgens, mitt[tags], nachmittags, abends とすべて小文字で書き始められている。
3. 「そして食後には批判をする」の「そして」は、オリジナルでは u.であるが、廣松渉版では und と表記されている。

以上三点の乖離は、余り重要性のない乖離と言うこともできようが、致命的な乖離は以下の二つの乖離である。

4. 第三の改稿過程において、廣松渉版では、エンゲルスがまず「靴屋になり、午後には庭師になり、夕方には俳優になることができるようになる、[私がまさに好きなように]」を削除し、「狩りをし、午後には漁をし、夕方には牧畜を営み、私がまさに好きなように、狩人、漁師、あるいは、牧人になることなしに」を新たに書き加えたと表記されているが、オリジナルにおける訂正は、「靴屋 Schumacher」を「狩りをし zu jagen」に、「庭師 Gärtner」を「漁をし zu fischen」に、「俳優になり Schuspieler...sein」を「牧畜を営み Viehzucht...treiben」に書き換えたにすぎず、削除されたのはわずかに四単語に過ぎない。廣松渉版では「午後には」「夕方には」「[私がまさに好きなように]」は、一度抹消された後に、再度書き加えら

れたように表記されているが、オリジナルではこれらは全く訂正されていない。

全体として廣松渉版では、マルクス、エンゲルスによる改稿が実際よりも誇張されて表記されているが、この誤りは廣松渉版がアドラツキー版のテキストと異文に追隨したために引き起こされたものであった。

2. ボーゲン[2] 第1頁の編集

〔日本語読者の便宜のために、問題となる箇所¹⁾の渋谷正訳を最初に掲げる。

「<ドイツで行われた>⁵⁾F⁵⁾批判は、その最近の諸労作にいたるまで、哲学の地盤を離れなかった。<それは>²⁾みずからの<哲学的>一般哲学的諸前提を究明するどころくではなかったので>³⁾か、<それが取り組んだ>⁴⁾そのすべての問題は、かえってある特定の哲学体系、すなわち、ヘーゲルの体系の地盤の上で<生じ [た]>生じ [た]⁵⁾た。<したがって>その答えのなかにのみならず、<むしろ>すでに問いそのもののなかに、神秘化が<あった>⁶⁾あった。ヘーゲルへのこのような依存が、これら近年の批判家たちのだれもがヘーゲルを超えていると主張 F⁶⁾<するにもかかわらず>、なぜ彼らのだれひとりとしてヘーゲル体系の包括的批判を試みさえ<しなかった>しなかったか、ということの理由である。」(渋谷正版 p. 20-21)

本文に対する注記

「2) 3) 最初にエンゲルスは Sie war soweit davon entfernt (それは...どこではなかった) と書いたが、マルクスが、Sie war so を抹消して、weit の w の上に大文字の W を書き重ねて、soweit を Weit に変えた。この結果、最初の文章が、Weit davon entfernt (...どころか) に変えられた。

4) 「その (ihre)」は、マルクスによって、「すべての問題 (sämtliche Fragen) の前の行間に書き込まれている。これにともなって、マルクスは、sämtliche (すべての) の末尾に n を書き加えて、これを sämtlichen に変えた。

5) 「生じた」は、エンゲルスが、最初に過去形の wuch[sen] を書きかけてこれを抹消し、そのあとに現在完了形の gewachsen sind を書いた。さらに、マルクスが、この sind を抹消したあとで、「すべての問題 (sämtliche Fragen)」の前に記されている daß を抹消して、その上の行間に改めて sind を書き込んだ。

6) 最初にエンゲルスは Es lag daher nicht nur in ihren Antworten, sondern schon in den Fragen selbst eine Mystifikation と書いた。この最初の文案にたいして、

⁵⁾ F は、マルクスによる挿入記号。同じ行の右欄に「F ドイツ的」という書き込みがある。

⁶⁾ F は、マルクスによる挿入記号。同じ行の右欄に「F しようとも」という書き込みがある。

マルクスは、Es lag daher を抹消し、nicht の n の上に大文字の N を書き重ねて、Nicht を文頭においた。さらに、sondern を抹消し、eine Mystifikation の前の行間に、挿入線を引いて lag を書き込んだ。」(渋谷正版 別巻 p. 18-19)

A. アドラツキー版

【本文】

Die deutsche Kritik hat bis auf ihre neuesten Efforts den Boden der Philosophie nicht verlassen. Weit davon entfernt, ihre allgemein-philosophischen Voraussetzungen zu untersuchen, sind ihre sämtlichen Fragen sogar auf dem Boden eines bestimmten philosophischen Systems, des Hegelschen, gewachsen. Nicht nur in ihren Antworten, schon in den Fragen selbst lag eine Mystifikation. Diese Abhängigkeit von Hegel ist der Grund, warum keiner dieser neueren Kritiker eine umfassende Kritik des Hegelschen Systems auch nur versuchte, so sehr Jeder von ihnen behauptet über Hegel hinaus zu sein.

(アドラツキー版, S.8)

[ドイツの批判は、その最近の諸労作にいたるまで、哲学の地盤を離れなかった。みずからの一般哲学的諸前提を究明するどころか、そのすべての問題は、かえってある特定の哲学体系、すなわち、ヘーゲルの体系の地盤の上で生じた。その答えのなかにのみならず、すでに問いそのもののなかに、神秘化があった。ヘーゲルへのこのような依存が、これら近年の批判家たちのだれもがヘーゲルを超えていると主張しようとも、なぜ彼らのだれひとりとしてヘーゲル体系の包括的批判を試みさえしなかったか、ということの理由である。]

【異文】

18 Die <in Deutschland geübte> deutsche Kritik 19-21 <Sie war soweit> Weit davon entfernt, ihre <philosophischen> allgemein-philosophischen Voraussetzungen zu untersuchen, <daß sämtliche Fragen, mit denen sie sich beschäftigte,> sind ihre sämtlichen Fragen 22 Systems, des Hegelschen, <wuch> gewachsen <sind>. <Es lag daher nicht> Nicht nur 23 Antworten, <sondern> schon in den Fragen selbst lag eine Mystifikation. 26 auch nur <versucht hat, obwohl> versuchte, so sehr Jeder

(アドラツキー版, S.568)

B. 廣松渉版

Die <in Deutschland geübte> **deutsche** Kritik hat bis auf ihre neuesten Efforts den Boden der Philosophie nicht verlassen. <Sie war soweit> **Weit** davon entfernt, ihre <philosophischen>

allgemein-philosophischen Voraussetzungen zu untersuchen, <daß sämtliche Fragen, mit denen sie sich beschäftigte,> **sind ihre sämtlichen Fragen** sogar auf dem Boden eines bestimmten philosophischen Systems, des Hegelschen, <wuch[sen]> gewachsen <sind>. <Es lag daher nicht> **Nicht** nur in ihren Antworten, <sondern> schon in den Fragen selbst **lag** eine Mystifikation. Diese Abhängigkeit von Hegel ist der Grund, warum keiner dieser neueren Kritiker eine umfassende Kritik des Hegelschen Systems auch nur <versucht hat,> **versuchte**, <obwohl> **so sehr** Jeder von ihnen behauptet, über Hegel hinaus zu sein. (廣松渉版 S.10)

〔「<ドイツで行われている> **ドイツ的**批判は最近時の労作にいたるまで、哲学の地盤を離れてはいない。<それは>¹⁾自分の<哲学的>一般哲学的諸前提を考究する<には及びもつかなかったの> **どころか**、<それが扱ったところの全問題は> **その全問題は**、或る特定の哲学体系、つまり、ヘーゲル体系を地盤にして<成長 [した] >成長をとげた<のであった>ほどである。<従って、それは>¹⁾その回答においてのみ<ならずして> **ならず**問題そのものにおいてすでに誤魔化しくであった> **があった**。ヘーゲルへのこの依存性こそが、これら近時の批判家たちが、誰しも自分はヘーゲルを超えていると主張<するにもかかわらず> **しながら**、誰一人としてヘーゲル体系の包括的な批判を<これまで試みていない> **試みなかった**理由である。

1) 抹消したのはマルクス。

〕 (廣松 p.10)〕

廣松渉版をアドラツキー版の本文および異文と比較すれば、前者が、アドラツキー版の異文を忠実に本文に組み込んでいることがよく分かる。

C. 試行版

【本文】

Die deutsche Kritik hat bis auf ihre neuesten Efforts den Boden der Philosophie nicht verlassen. Weit davon entfernt, ihre allgemein-philosophischen Voraussetzungen zu untersuchen, sind ihre sämtlichen Fragen sogar auf dem Boden eines bestimmten philosophischen Systems, des Hegelschen, gewachsen. Nicht nur in ihren Antworten, schon in den Fragen selbst lag eine Mystifikation. Diese Abhängigkeit von Hegel ist der Grund, warum keiner dieser neueren Kritiker eine

5
10

umfassende Kritik des Hegelschen Systems
auch nur versuchte, so sehr Jeder von ihnen
behauptet über Hegel hinaus zu sein.

15

(試行版 S.33)

[訳文は、アドラツキー版本文の訳文と同一なので省略する。]

【異文】

33.4 in Deutschland geübte > ^m deutsche ^m

33.6-11 1 Sie war soweit davon entfernt, ihre **a** ----

b allgemein-

2 ^m -----Weit „ „ „ „

1 **a** philosophischen

Voraussetzungen zu untersuchen, daß

b „ **SV**⁷

2 ^m „ „ „ „ , sind

1 ----- sämtliche Fragen, mit denen sie sich beschäftigte,

2 ^m ihre sämtlichen „ -----

1-2 ^m sogar auf dem Boden eines bestimmten philosophischen

1 Systems, des Hegelschen, **a** wuch[sen]

b gewachsen sind.

2 ^m „ „ „ „ „ „ -----.

33.11-12 1 Es lag daher nicht nur in ihren Antworten, sondern schon in

2 ^m -----Nicht „ „ „ „ „ „ „ „

1 den Fragen selbst -----

2 ^m „ „ „ lag

33.16 versucht hat > ^m versuchte ^m

33.16 obwohl > ^m so ^m sehr

(試行版 S.417-418)

⁷ SV : Sofortvariante [即時異文]

D. テキストの成立過程

D-1 【オリジナルによるテキスト成立過程の再現】

オリジナルにおけるテキストの成立過程は、渋谷正版の本文およびその注記、試行版の本文およびその異文がほぼ正確に再現している。それに従えば、草稿当該箇所形成過程は、以下の三段階からなる。各段階において、削除された部分は角括弧に入れ、付加された部分は太字で表記する。

1. (エンゲルスによる初稿) Die in Deutschland geübte deutsche Kritik hat bis auf ihre neuesten Efforts den Boden der Philosophie nicht verlassen. Sie war soweit davon entfernt, ihre philosophischen Voraussetzungen zu untersuchen, daß sämtliche Fragen, mit denen sie sich beschäftigte, sogar auf dem Boden eines bestimmten philosophischen Systems, des Hegelschen, wuch[sen].

[エンゲルスはまず、「ドイツで行われた批判は、その最近の諸労作にいたるまで、哲学の地盤を離れなかった。それは、みずからの哲学的諸前提を究明するどころではなかったので、それが取り組んだすべての問題は、かえってある特定の哲学体系、すなわち、ヘーゲルの体系の地盤の上で生じ」と書き進めた。]

2. (エンゲルスによる即時異文) Die in Deutschland geübte deutsche Kritik hat bis auf ihre neuesten Efforts den Boden der Philosophie nicht verlassen. Sie war soweit davon entfernt, ihre **allgemein**-philosophischen Voraussetzungen zu untersuchen, daß sämtliche Fragen, mit denen sie sich beschäftigte, sogar auf dem Boden eines bestimmten philosophischen Systems, des Hegelschen, <wuch[sen]> **gewachsen sind**.

[エンゲルスは、「哲学的 philosophischen」という形容詞の前に「一般 allgemein」という形容詞を挿入し、そのあとにハイフンを付けて「哲学的」と結びつけて「一般哲学的 allgemein-philosophischen」とした。また、「生じる wachsen」の過去形 wuchs を wuch まで書いて中絶した wuch を抹消して、それを現在完了形の **gewachsen sind** で置き換えた。それに続いて以下の文章を書いた。

Es lag daher nicht nur in ihren Antworten, sondern schon in den Fragen selbst eine Mystifikation. Diese Abhängigkeit von Hegel ist der Grund, warum keiner dieser neueren Kritiker eine umfassende Kritik des Hegelschen Systems auch nur versucht hat, obwohl Jeder von ihnen behauptet über Hegel hinaus zu sein.

そこで第二段階の文章は、次のようになる。

「ドイツで行われた批判は、その最近の諸労作にいたるまで、哲学の地盤を離れなかった。それは、みずからの**一般**哲学的諸前提を究明するどころではなかったので、それが取り組んだすべての問題は、かえってある特定の哲学体系、すなわち、ヘーゲルの体系の地盤の上で<生じ wuch>**生じた **gewachsen sind****。したがってその答えのなかにもならず、むしろすでに問いそのもののなかに、神秘化があった。ヘーゲルへのこのような依存が、これら近年の批判家たちのだれもがヘーゲルを超えていると主張するにもかかわらず、なぜ

彼らのだれひとりとしてヘーゲル体系の包括的批判を試みさえしなかったか、ということの理由である。』]

3. (マルクスによる修正) Die <in Deutschland geübte> **deutsche** Kritik hat bis auf ihre neuesten Efforts den Boden der Philosophie nicht verlassen. <Sie war sow>**W**eit davon entfernt, ihre allgemein-philosophischen Voraussetzungen zu untersuchen, <daß> **sind ihre** sämtlichen Fragen <, mit denen sie sich beschäftigte,> sogar auf dem Boden eines bestimmten philosophischen Systems, des Hegelschen, gewachsen <sind>. <Es lag daher n>**N**icht nur in ihren Antworten, <sondern> schon in den Fragen selbst **lag** eine Mystifikation. Diese Abhängigkeit von Hegel ist der Grund, warum keiner dieser neueren Kritiker eine umfassende Kritik des Hegelschen Systems auch nur versuchte <hat>, <obwohl> **so sehr** Jeder von ihnen behauptet über Hegel hinaus zu sein.

- 〔(1)マルクスは、「ドイツでおこなわれた」を抹消し、そこに F という挿入記号を記入し、右欄に「F ドイツ的」と記入した（渋谷正版本文参照）。
- (2)次にマルクスは、Sie war soweit で始まる次の文の冒頭の Sie war sow までを抹消し、w を大文字の W に変えた。これによってエンゲルス稿で主文であったものが Weit で始まる従属句に変わり、旧文の従属節 daß 以下が主節に変わった。これに伴って不要となった daß が抹消され、主動詞 sind の位置を前に移す必要が生じたため、抹消した daß のあとに sind を書き込み、文末の sind を抹消した。
- (3)マルクスは、関係詞節「それが取り組んだ」を抹消し、「すべての問題」の前の行間に「その ihre」を書き込んだ。これに伴って「すべての sämtliche」の末尾に n を書き加え sämtlichen に変えた。
- (4)マルクスは、次の文の文頭の三語 Es lag daher を削除し、次の語 nicht の語頭 n を大文字 N に書き換えて新しい文頭とした。さらに sondern を抹消し、eine Mystifikation の前の行間に、挿入線を引いて lag を書き込んだ（渋谷正版注記 6）参照。
- (5)「試みさえしなかった」を最初エンゲルスは、現在完了形 versucht hat で表記したが、マルクスはこれを過去形に変えるために、hat を抹消し、versucht の後に e を書き加えて versuchte とした。
- (6)マルクスは、「〔主張〕するにもかかわらず obwohl」を削除して、ここに挿入記号 F を記入し、右欄に「F〔主張〕しようとも so sehr」と書いた（渋谷正版本文参照）。マルクスによる修正を経た最終文章の訳文は、アドラツキー版本文の訳文と一致する。〕

D-2 【廣松渉版のオリジナルからの乖離】

廣松渉版による草稿の成立過程の再現を紹介することは省略する。廣松渉版がオリジナルから乖離する点は、以下の六点である。

- (1)「すべての〔問題〕」は、オリジナルでは sämtliche と書かれているが、廣松渉版では sämtliche と表記されている。
- (2)「一般哲学的〔諸前提〕」の改稿過程に関して廣松渉版では、マルクスがまず「哲学的 philosophischen」を抹消し、その後に「一般哲学的 allgemein-philosophischen」を書き加えたと表記されているが、マルクスは実際には「哲学的」には一切手を付けず、

- ただハイフン付の「一般的 *allgemein-*」を「哲学的」の前に書き加えただけであった。
- (3) 第二文の冒頭でマルクスは *Es war soweit* のうち *Es war sow* だけを削除し、小文字の *w* を大文字の *W* に書き換えたただけであったが、廣松渉版では、一旦 *Es war soweit* が抹消され、その後改めて *Weit* と書き加えられたように表記されている。
- (4) *Es lag daher nicht* の改稿においても、マルクスは、実際には、*Es lag daher n* までを抹消し、小文字の *n* を大文字の *N* に書き換えているだけなのに、廣松渉版では、*nicht* がまるごと抹消され、その後 *Nicht* と書き加えられたように表記されている。
- (5) 「試みさえしなかった」の改稿過程では、現在完了形 *versucht hat* を過去形 *versuchte* に書き換える際に、マルクスは *hat* を抹消し、*versucht* の末尾に *e* を書き足しているだけなのに、廣松渉版では一旦 *versucht hat* を抹消した後、改めて *versuchte* を書き加えたと表記されている。
- (6) 以上の乖離は、ある意味では枝葉末節の乖離と思われるかもしれない。しかし第六の乖離は、廣松渉版のテキストとしての信憑性を疑わせるに十分な乖離といえるものである。それは、D-1 のマルクスによる修正(3)に関わる。ここでマルクスは、関係詞節「それが取り組んだ、*mit denen sie sich beschäftigte,*」を抹消し、「すべての問題 *sämtliche*」の前の行間に「その *ihre*」を書き込み、それに伴って「すべての *sämtliche*」の末尾に *n* を書き加え *sämtlichen* に変えたただけであった。ところが廣松渉版では、「それが取り組んだすべての問題 *sämtliche Fragen, mit denen sie sich beschäftigte,*」がまるごと抹消され、その後改めて「そのすべての問題 *ihre sämtlichen Fragen*」が書き加えられた、つまりオリジナルでは全く手をつけられていない *sämtliche Fragen* が抹消され、また書き直されたかのように表記されている。

3. 廣松渉版の『ドイツ・イデオロギー』編集史上の地位

以上『ドイツ・イデオロギー』「第1章フォイエルバッハ」から二つの例を取り上げ検討したことから明らかなように、廣松渉版は、本文と異文を分離して掲載したアドラツキー版にほぼ全面的に依拠しつつ、異文を本文中に組み込んで編集したものである。そのことによってドイツ語を母語としない読者にマルクス、エンゲルスによる複雑なテキストの改稿過程を一覧的に編集表記した功績は認められるものの、廣松渉版は、オリジナル草稿の忠実な再現に失敗しているアドラツキー版の欠点をそのまま引き継ぐ結果となってしまった。これが廣松渉版の第一の誤りであった。

それでは廣松渉版が刊行された1974年の時点で、アドラツキー版の編集上の欠陥を克服する手だては存在しなかったのだろうか。否、存在していた。その二年前に試行版が刊行されていたからである。

渋谷正版は、その詳細な注記において試行版にもなお少なくない異文脱漏があることを指摘した。しかし、本報告第1節、第2節の考察が示しているように、試行版は、異文表記にいわゆる「論証的方法」を採用することによって、マルクス、エンゲルスによる複雑なテキストの改稿過程をかなり正確に再現することに成功しており、アドラツキー版の編集上の問題を基本的に克服した優れた版であった。試行版は学問的に信憑性のあるテキスト（本文と異文）をはじめ提供したという点で、『ドイツ・イデオロギー』編集史上画期

的な業績であった。もし廣松渉がこの試行版に依拠しつつ、試行版においても分離掲載されていた異文を本文に組み込んだテキストを編集したとすれば、廣松渉版は、試行版の正確さを継承しつつ、試行版とは異なる表記方法によって独自の編集史上の意義を獲得しえたはずであった。廣松渉は、試行版を参照しながら、試行版の意義を評価することができず、従って試行版に盛り込まれた貴重な情報を活かすことができず、なおアドラツキー版に執着し続けた。これが廣松渉版の第二の誤りである。

廣松渉は、「編者序文」「編者緒言」において、廣松渉版の編集においては試行版を詳細に批判的に検討し、試行版の誤りや不正確な記述を訂正しつつ、試行版よりも優れたテキストを編集したことを繰り返し強調している。廣松渉は、「編者序文」において次のように述べている。

「編者は、…新メガ（試行）版に対しても依然として不満なきを得ない。新メガ版…の出現を目前に控えながら、敢て自からの編輯案と標記法に則って鉛槧^{えんざん}にのぼせたのは、われわれのこの版本が新メガ版とは独立の存在意義をもつものと確信するからにほかならない。〔改行〕われわれの版本と新メガ（試行）版との文献学的優劣は、もとより識者の厳正なる判定に俟たねばならないが、一般の読者にとってはともあれ研究者たちにとっては、われわれの此の版本のほうが新メガ版よりも格段と便利な筈である。」（廣松渉版 p.ii）

試行版は、刊行当時、ごく少数のマルクス研究者に配布されたに過ぎなかったから、大多数のマルクス研究者はこの試行版を研究に活用することができなかった⁸。従って本報告において例証したような廣松渉版の根本的欠陥は、その刊行後長く気づかれぬままであった。『ドイツ・イデオロギー』編集史に果たした廣松渉の貢献に対する高い評価は、今なお続いている⁹。

年報版(2004年)の編集者インゲ・タウベルト Inge Taubert とハンス・ペルガー Hans Pelger も「序文」において次のように書いている。

「廣松渉が『第1篇フォイエルバッハ 唯物論的な観方と観念論的な観方との対立』という表題で編集した第1部第1篇の新刊行は、試行版の『第1章フォイエルバッハ』に依拠しており、とりわけ、テキストの新解読、手稿内部のテキスト展開、記述方式な

⁸ 「新メガ試行版は、草稿として僅かな部数が印刷され、発行目的に応じていくつかの研究所や鑑定家たちに送付されただけなので、一般には入手することができないものであった。それだから『第1章フォイエルバッハ』の編集は、一般の使用には供されないままに留まった。」（試行版 S.18）

⁹ 2005年1月に廣松渉版の中国語訳が出版された（彭曦訳、南京大学出版社）。また同年4月には、この出版を記念して南京大学において『ドイツ・イデオロギー』の文献学的研究とその現代的価値 第二回廣松渉とマルクス主義哲学・国際学術シンポジウムが開催された〔このシンポジウムについては『情況』（2005）を参照〕。なお中国における『ドイツ・イデオロギー』研究の現状については Tairako (2006)〔および大村・渋谷・平子 (2006a)〕を参照。

どの〔試行版の〕諸成果を受け入れている。同時に、編集の新方式が提示されていて、これの学問的編集上の業績は、『第1章フォイエルバッハ』の編集史上長く名を留めるであろう。」(年報 本文 S.18-19)

本報告が示したことは、これとは全く反対の事実である。つまり廣松渉版は、試行版には全く依拠していないし、試行版がもたらした諸成果をほとんど取り入れていない。もしとり入れていたならば、廣松渉版はそれなりに学術的価値のあるものになっていたはずである。従って、たとえテキストの表記方法に、試行版のそれとは異なる方式〔記述的方式〕が採用されているからといって、廣松渉版は『第1章フォイエルバッハ』の編集史上長く名を留める」価値はない。年報「序文」中の上記の文章は、年報の編集者たちが、廣松渉版のテキストの中身をほとんど検討していないことを告白する結果になった。

【廣松渉版の編集方針 訳者補遺】

廣松渉版の編集方針の個性は、その二年前に『ドイツ・イデオロギー』編集の最新版である試行版が刊行されたにもかかわらず、テキスト本文においては敢えて試行版の解説を取らず、「旧来の諸版」の読みを採用し、試行版の新機軸は脚注で選択的に言及するに留めたという点にある。従ってテキスト本文に試行版の読みが採用されてしまえば、それはもはや廣松渉版と見なすことはできない。従って、岩波文庫版はもはや「廣松渉編訳『新編輯版ドイツ・イデオロギー』」ではない。このことを以下に証明してみたい。

廣松渉は、「編者緒言」において、試行版について次のような評価を下している。

「〔試行版においては〕抹殺・修正・追補・筆蹟、その他、手稿に見出される諸事実の報告は、細大もらさずにおこなう建前になっている。(付録として収められている写真および他の初版での報告と対照してみると、遺憾ながら、若干の脱漏があるように見受けられる)。(同 p.xiv)

「手稿の綴字法をそのまま再現する建前になっている新メガ(試行)版は、一原則的には新しい綴字法をとることにしている旧来の諸版が敢て古い綴字法を残している諸箇所と対照してみただけでも、一実際には首尾一貫しておらず、若干の箇所では建前に反して、現代綴字法で印刷してしまっているように見受けられる。それゆえ、手稿そのものにおける綴字法を精確に再現すべき一覧表の作成は、…手稿の現物の繙読が許される機会を俟ったうえで、試みることにしたい。甚だ残念ではあるが、新メガ(試行)版にもとづいて、手稿での綴字法の実情を正確に復元しようと図っても、徒為に終るものと判断した所以である。」(同 p.xviii)

廣松渉は、結局、試行版における綴字法の首尾一貫性の不備を理由にして、試行版に依拠してテキストを復元しようとしても「徒為に終るものと判断した」のであった。

廣松渉が、試行版を信頼できぬものと判断する際に用いた方法は、「旧来の諸版」との比較であった。廣松渉は、「旧来の諸版」の判断が分かれている場合はいざしらず、判断が一致していて試行版だけが異なる判断を示している場合には、試行版の判断を誤りと見なすという、いわば多数決による判定方法を採用したのであった。

廣松渉版のテキストが基本的にアドラツキー版に依拠したものであることは、渋谷正(1996)が初めて明らかにした。しかし、廣松渉版の「編者緒言」を詳しく分析してみる

と、廣松渉が、読者には悟られぬような巧みなレトリックを用いて、事実上、アドラツキー版に依拠してテキストを編集することを宣言していることが理解できる。

それは、次のようなレトリックである。

- (1) まず新メガと「旧来の諸版」を分離して、上記の判定方法に従って、旧版諸版が一致している解説と新メガの解説が乖離している事例を発見して、試行版が信頼に値しない版であり、従って、試行版に依拠した草稿の再現が「徒為に終る」ことを、強烈に読者に印象づける。
- (2) 次に、「手稿そのものを手元に有せぬわれわれとしては、旧来の諸底本の報告に頼らざるをえない」(同 p.xvii) ということを読者に納得させる。

「われわれのこの版本では、旧来の諸版〔ここには試行版は含まれていない〕で報告されている手稿に見出される諸事実を細大もろさず記載し、かつ、諸底本のあいだに判読・記載・報告に相違がある場合には、最も妥当と思われる形を本文中に掲げ、諸版との相違点は(句読点の打ち方にいたるまで)脚注で明示しておいた。」(同 p.xix) 核心は、「旧来の諸底本」から試行版はすでに除外されていることである。

- (3) 「旧来の諸底本」としては、リャザーノフ版、アドラツキー版、ドイツ語新版の三つが挙げられている。しかしリャザーノフ版は、「抹殺されている語句やマルクスの添削のうち余り重要でないと判断されるもの、および全文が抹殺されていて他の篇に再現するものについては、記載や註記を省いている」(同 p.xi)、またドイツ語新版も「抹殺されている字句や加筆／修正の事実、筆蹟などについては、特別な場合以外、報告していない」(同 p.xiii) ので、これら両版に関しては、脚注での言及以上の文献的価値がないことは明らかであった。従って「旧来の諸底本の報告に頼る」とは、事実上、アドラツキー版に頼ることに等しくなるにもかかわらず、このことは決して明言されない。

以上が、「編者序文」「編者緒言」の分析から得られる廣松渉版の編集方針である。

「加筆の時点についてアドラツキー版と新メガ(試行)版との推定に相違が見られるものについては、文脈や両版での扱い方からみて蓋然性の大きい方に即して印刷し、版による推定の相違を適宜脚注に記すことにする。」(同 p.xvi)

「編者緒言」を詳細に読み込めば、「アドラツキー版と新メガ(試行)版との推定に相違が見られるものについては」アドラツキー版を採用するという「編集方針」が内々に決定されていたことが推測できる。しかも「版による推定の相違を適宜脚注に記す」と宣言されているにもかかわらず、実際のテキストにおいては、とりわけ決定的箇所において、試行版の解説は脚注においてさえも示されていない。このことは、第1節、第2節の具体的分析が示したとおりである。

『ドイツ・イデオロギー第1巻第1篇』のテキスト本文においては試行版を用いず、「旧来の諸版」(事実上はアドラツキー版)を用いること、そして試行版の前者から乖離する解説については精々脚注であげるにとどめる(しかも取捨選択して)こと、これが廣松渉の基本的編集方針であった。廣松渉は、敢えて試行版と対決する編集方針を採りつつ、「われわれの版本と新メガ(試行)版との文献学的優劣は、もとより識者の厳正なる判定に俟たねばならない」(同 p.ii) と述べたのであった。

オリジナル諸草稿を実際に精査して編集を行った試行版に対して、「手稿そのものを手

許に有せぬ」者が「旧来の諸底本の報告」だけを「頼り」として試行版のテキストと対決し、それとは別のテキストを編集するということは、たしかに、無謀な試みであった。とはいえ、オリジナル諸草稿との厳密な比較考証によって廣松渉版と試行版の「文献学的優劣」が決定されるまでは、廣松渉版は一つの編集仮説として生き残ったのである。

廣松渉版の文献学的価値を最終的に否定したものが、渋谷正版の刊行（1998年）とそれに先行する論文「『ドイツ・イデオロギー』の編集問題」（渋谷 1996）であった。渋谷正は、アムステルダム の社会史国際研究所で実際にオリジナル諸草稿を精査解説しつつ、廣松渉版も含め従来のすべての版の「文献学的優劣」を判定した。

しかしその後も、廣松渉版に対する高い評価は訂正されず、2002年には小林昌人を補訳者とする岩波文庫版が刊行された。しかし岩波文庫版のテキストでは、数え切れない程多くの箇所、廣松渉版の解説が放棄され、試行版の読みが採用されている。本報告で検討した二つの箇所に対応する岩波文庫版のテキストは、以下のとおりである。

【オリジナル草稿 17 頁】

「これにひきかえ、共産主義社会では、各人は排他的な活動領域というものをもち、任意の諸部門で自分を磨くことができる。共産主義社会においては社会が生産の全般を規制しており、まさしくそのゆえに可能になることなのだが、私は今日はこれを、明日はあれをし、朝は<靴屋>狩りをし、<そして昼「には」>午後は<<庭師>漁をし、夕方には<俳優である>家畜を追い、そして食後には批判をする一<獵師、漁夫、<あるいは>牧人あるいは批判家になることなく、私の好きなようにそうすることができるようになるのである。』（岩波文庫版 p.66-67）

【ボーゲン {2} 第1頁】

「<ドイツで行われた>ドイツ的批判は、最近の労作に至るまで、哲学の地盤を離れていない。それは自分の一般哲学的な諸前提を考究する<には及びもつかなかったので>どころか、<それが扱った>その全問題にしても、ある特定の哲学体系、つまりヘーゲル体系の地盤の上で成長したものであった。<それゆえ>回答の内にだけでなく、<むしろ>問いそのもの内に、すでにごまかしがあった。このようなヘーゲルへの依存性こそが、これら近年の批判家たちが皆ヘーゲルを超えていると自称くするにもかかわらず>しておきながら、誰一人としてヘーゲル体系の包括的批判を試みさえくしてこなかった>しなかった理由である。』（岩波文庫版 p.38）

以上の訳文を、第1節、第2節で紹介した廣松渉版、試行版、渋谷正版の解説文と対照させてみれば、岩波文庫版が、テキストの決定的箇所において、つまり廣松渉版・アドラツキー版と試行版・渋谷正版とが鋭く対立する解説を提示している箇所において、試行版・渋谷正版の解説を採用していることがわかる。

補訳者の小林昌人は、編集に当たって、自分が補訳者として、(1)文庫用に訳文を平易なものに訳し直し、(2)新たに訳注を付け、(3)横組みを縦組みにすることだけを行い、「河出版の原文テキスト篇は、現在でも国際的水準のトップにある」からして、テキストそれ自体の書き換えは行っていないと、「解説」で述べている（岩波文庫版 p.313-315）。しかし

実際には、廣松渉版・アドラツキー版テキストから試行版・渋谷正版テキストへの書き換えが広範に行われているのである。

従って、岩波文庫版はもはや廣松渉編訳『新編輯版ドイツ・イデオロギー』ではない。試行版と文献学的に対決するという廣松渉版の基本的編集原理が放棄されているからである。廣松渉自身は、「われわれの版本と新メガ（試行）版との文献学的優劣は、もとより識者の厳正なる判定に俟たねばならない」（同 p.ii）という学問的良心を堅持していた。しかし岩波文庫版は、解説テキスト本文に関して試行版・渋谷正版を借用することによって廣松渉版の敗北を事実において承認しつつ、試行版・渋谷正版の解説方式が1974年の「河出版の原文テキスト篇」においてもすでに採用されていたかのような「解説」を行っている。これは、故廣松渉の名誉を二重に傷つけるものではないかと、訳者は考える。

4. 東アジアの『ドイツ・イデオロギー』編集史において渋谷正の果たした役割

渋谷正は、1995年アムステルダム社会史国際研究所において廣松渉版のテキストを『ドイツ・イデオロギー』のオリジナル諸草稿と各行ごとに精密に比較したという。本報告で述べた廣松渉版の編集上の誤り、脱漏、不正確な記述などを初めて指摘したのは渋谷であった。渋谷は、廣松渉版に対する詳細な批判を1996年に公表した（渋谷 1996参照）。1974年刊行以来20年余に渡って『ドイツ・イデオロギー』「第1章フォイエルバッハ」の最高編集版であると見なされてきた廣松渉版が1932年刊行のアドラツキー版の水準に立つものにすぎず、1972年刊行の試行版の水準にはるかに及ばないことを、日本のマルクス研究者はこれによって初めて知ることになった。

1998年に渋谷は、マルクス、エンゲルスの手稿の詳細な解説に基づいて、東アジアで初めて『草稿完全復元版 ドイツ・イデオロギー [序文・第1巻第1章]』を日本語で刊行した。渋谷正版では、『別巻』「注記」において、本文および異文の状態に関する詳細な記述が付けられている。「注記」では、リャザーノフ版、アドラツキー版、試行版に関して、本文・異文再現上の誤り、脱漏、不正確な記述なども指摘されている。

2004年に刊行された年報版に対しても、渋谷は、なおオリジナルと乖離する箇所が存在することを指摘した。しかし渋谷の批判の重点は、新メガが採用した論証的表記法と異文の並行表記法 *Zeilenparallelisierung* [これは、第1節、第2節の試行版の異文表記に用いられた方法である] に向けられた [Shibuya (2006)参照]。

新メガが採用した論証的表記法は、すでに考察したように、テキストの複雑な改稿過程を時系列的に正確に再現する上で威力を発揮する方法であり、この方法を採用したことは、新メガ編集委員会の大きな功績の一つであった。

しかしこの方法には、次のような欠陥も存在している。

第一に、本文には最終稿だけを掲載し、それまでの改稿作業はすべて別巻のアパレートに掲載するという方式では、諸草稿の実際の状態を忠実に再現することはできない。しかも、非常に複雑な修正の手が加わった箇所では、抹消と付加の順番を時系列的に一義的に確定することが困難である場合が少なくない。そのような場合でも、論証的方法では、編集者の判断において改稿過程のただ一つの時系列的な順番を提示しなければならない。ここに学問的根拠を欠いた恣意的な判断が入り込む余地が生じる。そのような危険を冒すく

らいならば、むしろ、諸草稿の実際の状態を記述的に、つまり写真を見るように再現することによって、読者自身がテキストの成立過程を検討することができるように配慮する方がより適切あるかもしれない〔この方法は、記述的方法 *deskriptive Methode* と呼ばれている。廣松渉版、渋谷正版で採用されたテキスト再現法である〕。

第二の問題は、論証的に表記された異文目録は外国語（とりわけ非ヨーロッパ諸言語）に翻訳することがほとんど不可能であることである〔このことは、本報告の第1節、第2節において試行版の異文の翻訳を行わなかった理由でもある〕。他方、記述的方法に従って再現されたテキストであれば、これはいかなる外国語にも翻訳することができる〔これは、廣松渉版、渋谷正版が記述的方法を採用した理由の一つであった。これに対して新メガ編集委員会が論証的方法を重視するもう一つの理由は、論証的方法では、最終稿だけが本文として表記されるため、これを学術的に自由に引用することが可能であるが、記述的方法では複雑な改稿過程が本文に繰り込まれて表記されるために、本文の引用が不可能ないし著しく困難になることである〕。

この間の情報技術の進歩によって、『ドイツ・イデオロギー』の諸草稿全体のオリジナル画像とその解説文の双方を一つのCDに収録することが可能となった。もしこのようなCDが提供されるならば、読者は、新メガの第1部門第5巻として編集されたテキストをそれに対応するオリジナルの画像と比較し、編集テキストの正確さを自ら検証することが可能となる。オリジナルのデジタル画像とその解説文をフレキシブルに組み合わせるならば、従来とちがって、諸草稿の状態を再現するために基本的に文字記号のみに頼る必要もなく、従って、論証的方法か、記述的方法かをめぐる論争も、発展的に解決することが可能となる。

新メガの編集は、これまで常に論証的表記の原理に準拠して行われてきた。メガ全体の編集上の統一性を保持するためには、第1部門第5巻『ドイツ・イデオロギー』の編集に対してもこの原理が適用されるべきである。そこで、新メガの書物巻の編集としては論証的方法を用いつつ、上述した論証的方法の弱点を補完するために、かつオリジナル画像を参照しつつ読者自身が編集されたテキストの正確度を自ら判断することを可能にするために、書物巻とは別に、オリジナルとその解説を収録し、多様な目的に利用可能な画像処理、検索処理を装備したCDが作成されることが望ましい。

文献（アルファベット順）

張一兵（2007）「文献学とマルクス主義基本理論研究の科学的立場」『情況』2007年5月号別冊

『情況』（2005）特集「廣松渉版『ドイツ・イデオロギー』国際シンポジウム」上（『情況』2005年8/9月号）下（『情況』2005年10/11月号）

小林昌人（2007）『ドイツ・イデオロギー』編集問題の歪曲』『情況』2007年5月号別冊

大村泉・渋谷正・平子友長（2006）「新メガ版『ドイツ・イデオロギー』の編集と廣松渉版の根本問題（上）」『経済』2006年10月号、新日本出版社

大村泉・渋谷正・平子友長（2006a）「新メガ版『ドイツ・イデオロギー』の編集と廣松渉版の根本問題（下）」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第47号、2006年10月

- 渋谷正 (1996) 「『ドイツ・イデオロギー』の編集問題」『経済』1996年6月号、新日本出版社
- 渋谷正 (2004) 「『ドイツ・イデオロギー』はいかに編集されるべきかー岩波文庫版『ドイツ・イデオロギー』をめぐって」(上)(中)(下)『経済』2004年1, 2, 4月号、新日本出版社
- SHIBUYA, Tadashi (2006), Probleme zu der Anordnung und der Wiedergabe der *Deutschen Ideologie* im *Marx-Engels-Jahrbuch 2003*. Referat zu : Deutsch-japanisches Arbeitstreffen zur Marx-Engels-Edition an der Berlin- Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften 24-28. Nov. 2006. [渋谷正「『マルクス・エンゲルス年報2003』における『ドイツ・イデオロギー』の配列および再現の諸問題」ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー主催マルクス・エンゲルス編集・独＝日専門家会議(2006年11月24-28日)における報告]
- TAIRAKO, Tomonaga (2006), Die neuesten Tendenzen der Deutschen Ideologie-Forschung in Asien, In: Die historisch-kritische Edition von Marx' Kapital in deutsch-japanisch-russischer Forschungskoooperation. Wissenschaftliche Mitteilungen Heft 6. Argument Verlag, Hamburg. [平子友長「アジアにおける『ドイツ・イデオロギー』研究の最新動向」国際新メガ・コロキウム「日・独・露の研究協力によるマルクス『資本論』の歴史的ー批判的編集」(2005年11月21-24日)における報告]
- TAIRAKO, Tomonaga (2006a), Die Grundfehler der Hiromatsu-Edition der *Deutschen Ideologie*. Referat zu : Deutsch-japanisches Arbeitstreffen zur Marx-Engels-Edition an der Berlin- Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften 24-28. Nov. 2006. [平子友長「廣松渉版『ドイツ・イデオロギー』の根本問題」上記マルクス・エンゲルス編集・独＝日専門家会議における報告]